

晉遊紀行

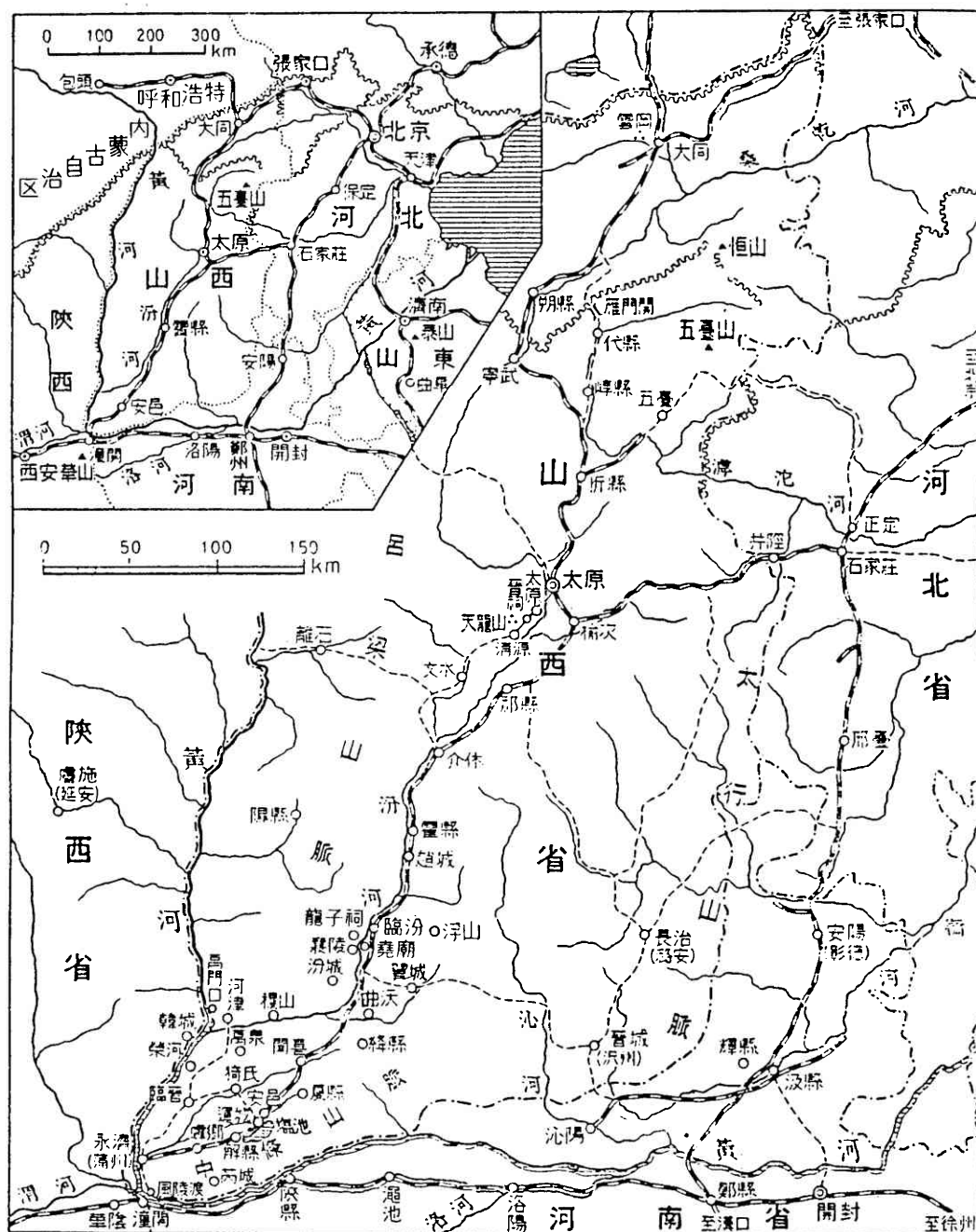
昭和十五・六年

日比野 丈夫

はしがき

これは昭和十五年十二月十二日から、同十六年一月十一日に至る一カ月間の旅行日記である。晉遊紀行と名付けたように、内容は中国の山西省を縦断して沿途の古蹟を調査したさいの旅程を主としている。調査記録はすでに昭和三十一年に『山西古蹟志』として出版してあるが、わたくしの手になる、この日記だけが未発表のまま手もとに残された。古蹟志の中では言及できなかった旅行の順序とともに、日毎に移り変わる地形、風物をも詳記しておいたつもりだから、併せ参考していただきたい。

思えば、すでに半世紀以上も昔のこととなった。東方文化研究所に勤務していたわたくしは、外務省文化事業部の特別研究員に推薦されて、昭和十四年の夏から北京に在留していた。翌十五年の秋から冬にかけては、東方文化研究所の故水野清一、故長廣敏雄氏らが主宰する大同雲崗の石仏調査に参加。それが終ると渾源縣の調査に出かけ、いったん大同に戻ってのち水野清一氏とともに山西旅行に出発したのである。その行程は日記に見える通りであるが、時はまさに日中戦争の最中で、都市も農村も至るところ戦禍のために無惨な破壊を被っていた。



山西省要圖（旅行當時）

この図は山西古蹟志の挿図に若干の地名を増補したものである。行政区画や交通路もすべて当時のままにしておいた。向って左上の図は修正を加えて、現状の概略を示したつもりである。

行くさきぎきで多くの方々から筆舌に尽されぬお世話になったが、今日では一々具体的に御礼申し上げにくい事情があるのを残念に思っている。汽車や自動車については、華北交通株式会社の社員諸氏から格別の便宜を計っていただいた。このような点に関して、日記には何度か手を入れ原稿を書き改めた。水野氏に見てもらった部分もあるが、現在となつてはすべての責任がわたくしにあることを明らかにしておかねばならない。

大同から太原へ

昭和十五年十二月十二日

昭和十五年も押し詰った十二月十二日、午前九時三〇分発、寧武行きの列車で大同駅をたつ。寒い朝であつた。

二等車とはいっても、先頭の一両を仕切った半分だけで、あとは三等、しかも貨物との混合列車である。しかし、車内はスチームで暖かいくらい、それに京包線ほどにこまなのがないのよりの幸せであつた。外はかんかんに大地の芯まで凍てついた冬景色で、山かげ土かげにまだら雪がみえ、川も一わたり凍ててしまっている。窓ガラスは水蒸気で曇って、すぐに外が見えなくなる。退屈なままに、ときどきそれを拭いて景色に眺めいる。広々とした平野に、人影も樹影もない。盆地を取り巻いた遠い山まで、なんの遮ぎるものもなく平坦な土が続いている。

列車は玉河の右岸に沿って南進する。懷仁、岱岳鎮、いずれも懐しい曾遊の地である。朔縣の近くになって桑乾河を越える。河幅は二、三百メートルであるが、水量はそう大したものではない。しかし、この地方第一の大河で、末は流れて永定河となり、蘆溝橋下に行くのである。

桑乾河を越えたところから、恐しい風が吹いた。午後三時半、朔縣へ降りたときは、まさにその最中でゴーゴーと音を立てて、砂塵を飛ばした。まことに文字通りの朔風であつた。眼も明けられないし、口の中もたちまちジャリジャリという。案内知った道ながら、一キロほどのところを洋車に揺られて行くのを、非常に長いように思った。

城内はさすがに風も弱く、砂も飛ばない。城壁は立派だし、町の中は静かである。街路も堂々と広く、しかも石敷きで、ことに両側の古風な軒並が嬉しかった。

わざわざ朔縣で降りたのは、ここに崇福寺という古刹があつて、金代の建築が残っているからである。学界に知られるようになったのは新しく、日華事変以後のことである。ともかくも日のあるうちというので、宿に荷物を下すとすぐ急いで寺に行った。伽藍のうち金代のものとして確かなのは、本殿にあたる彌陀殿である。七間の大伽藍、その堂々たる木組みは、実に雄大そのものであり、さすがに金代の古建築としてその名に背かぬものであつた。そのうゑ殿内の壁画がまた当代の規模をほぼそのままに伝えているのは、珍しいと思う。牡丹唐草のある礎石や壁画やなにかの撮影に、夕方暗くなるまでかかった。

十二月十三日

朝五時半に起床、急いで朝食をとり、六時出発。もちろんまっ暗だ。大陸の冬は六時とはいってもまだ夜中である。おまけに昨日からの風がまだ吹いていた。城外に出てからは、ただ駅の電燈だけが目当てで、また心頼りであつた。

七時発の列車に乗りこむ。これは昨夜〇時四五分に大同を発した太原行直通列車である。車内は暖かく、座席は昨日よりも空いていた。しかし、やがてまた風が勢いをまし、昨日よりも一層猛烈に吹きだした。外は恐しく砂塵を吹きまくっているとみえて、たえずバラバラとガラス戸に降りかかる。ともすると、列車まで激しく左右に揺れる。そして、砂は閉め切ったガラス戸の隙間からいつとはなしにしのびこんできて、窓縁も座席もまっ白になってしまう。

夜が明けそめるころ、陽方口を通過して内長城線を越えた。列車は山にかかり、一しきり山腹に沿って走り、やがて寧武駅に着いた。風もようやく止んだらしい。県城は狭まい灰河の谷の向こうに、朝の陽光を浴びてくつきりと浮かんで見える。民家、廟、人通り、河岸から起こって蜿蜒として山へ這い上って行く城壁が遠く、しかしはつきりと見える。

九時二七分、列車は寧武駅を発し、県城からしだいに遠ざかったが、しばらくするとまた県城が目の前に現われた。隠れては現われ、現われては隠れること数回、不思議に思っていると、列車はジグザグの道を通って山上へ山上へと上っているのである。いま通ってきたレールが、またこれから通ろうとするレールがすぐ目の前に見える。その間にはそう大した谷もない、岩もない、木もない。ただ平凡な一様の

斜面が見えるだけである。

段家嶺を過ぎ、長珍に至って山がきわまり、いよいよ下りになる。これを分水嶺として、これからは滹沱河の上流になる。寧武の灰河は北流して桑乾河に入るのである。そこから狭い谷、沙岩の間を流れる溪流に沿うて下り、しばらくしてまた緩くなった川に沿うて進む。と、河岸に広がった軒崗鎮の石炭町が見えだした。町のまん中に十字架の教会堂あたりを圧しているように見える。山を下ったせいか、大氣がよほど暖かく感ぜられた。やがてまた一わたり谷間を通ったのち、沙峪口あたりでやや開けはじめ、原平鎮では広い平野となる。三時半になって忻縣に着いた。ここはもう滹沱河上流の大平野である。東方には山も見えぬ。路傍の畑には到るところに墓地があつて、土饅頭の上に宝珠形の石を載せているのが、珍しく思われた。

ここから南下して、一つの低い丘陵を越えると、汾水の太原盆地となる。この丘一つで滹沱河と汾水とを分かっているのである。

夕闇がせまり、十四日の月がようやく輝く八時二〇分、太原駅に着いた。

洋車に導かれて城内に入り、首義門大街をちよつと東に入つた胡同の晋恒大旅社というのに宿をとる。部屋は小さいが、新築で割合にきれいである。すぐに食事に出た。柳巷街の北口に近いとある中国料理屋に入った。ここも新開店らしかったが、余りきれいではなかった。二人の女招待が代わる代わる出てきた。一人は十七歳で清源の娘だという。昨日来たばかりで、まだちつとも馴れないのだと、つれの女招待がいつていた。清源といえば、太原のつい南にある県で、葡萄酒の名産地である。思い出して早速一瓶買わせた。新鮮な地酒の味に舌づつみを打つ。しかし、料理は一向に特徴のない平凡なものであつた。

十二月十四日

宿の院子へやってきたもの売りから、油炸菓と杏仁茶をとって朝食をすました。午前はず城内の東南に近い太原図書館へ行つた。こはもと省の文廟だつたところで、境内は頗る広く、古柏が蔚蒼と茂つていた。省立図書館になっており、博物館をも兼ねていた。陳列は古物のみならず、動植物、鉱物の標本にも亘っている。古物の部をざっと一巡したが、崞縣出土の元代の墓甕や六朝の四面碑が注意をひいた。しかし、期待していた萬泉縣荆村の彩色土器関係の遺物が意外に少いのが寂しかった。

昼食後、傅公祠へ行つた。ここは明末、清初の学者、傅山（青主）の祠堂である。その一角に省内各地から集めた古碑の陳列所がある。

日の当らぬ西廂で、夕方まで殆んど半日がかりでそれを調べた。十二月の半ばというけれども、余り寒いとは思わなかった。人に拓本屋を捜しに行ってもらったが、五、六十歳位のおやぢがやってきて、いまは寒いからだめだ、もっと暖かくならなくては、というのであきらめた。

天龍山と晉祠

十二月十五日

今日は待望の天龍山行きである。西南の城門を出るとすぐ汾水で、長い木橋を渡る。汾水は広い太原の盆地をうねりながら、緩やかに流れている。冬のせいか水量もさほど多くない。坦々たる道路を一路西南に向かう。大きな自動車路である。ここを晉祠鎮、清源縣に至る定期バスが通っている。

右には低い山がま近に迫り、左には汾水の河原が見渡される。あたりはよく肥えた沖積盆地で、黒色の畑地が広がっており、ところどころに灌漑用の水路や井戸が見受けられた。村落の立派なのはなにより土地が豊かなのを物語っている。あちこちの土壁で、紙をはりつけて干しているところがあった。左手に太原縣の城壁を見過して、しばらく走ればやがて晉祠鎮である。

町を取り巻いた城壁が山の裾まで、ぎりぎりに迫っている。北の城門から入ると、町並はなかなか立派で、家にもなんとなく趣きがあり、落付いた町であった。道は狭いが石敷きで、家々の簷下には到るところに清い水がいそがしく流れていた。

出発が遅れたために、もうすでに十一時に近かった。晉祠の町を南に出て、四キロばかり進んだところで車を降りた。これからは乗馬である。そこから山裾を斜めに入ると、小さい谷の口に牛家口という部落があった。道はまっ黒で、民家も樹木も岩石も一面に埃を被って、どす黒く汚れていた。

ここから道はいよいよ谷間にかかる。砂岩の山を断ち切った狭い谷で、あまり大きくない溪流が底を流れている。その縁に沿った細い道を徐々に上っていくのである。上流からは石炭を積んだ一輪車や馬車が次ぎ次ぎと降りてくる。狭い道でその行列とすれ違わなければなら

ないのである。石炭は殆んど粉炭らしい。その粉がこぼれ落ちたためであろう、谷間の道は一面に真黒な土埃に埋もれ、水底までをも黒い色に染めていた。

とどこころに貧弱な部落があり、また、明礬を作る窯があつた。十二月だから、さすがに山かげにはつらの下つていところもあつた。谷を登りつめると、窯頭村というところに達した。午後一時近くであつた。そこには、晉逢窯という煤窯があつて、石炭の馬車が一ぱいに集つていた。下の谷をのぞくと、そこにも石炭を運ぶ駱駝の行列がゆるゆると歩を運んでいる。

ここで一休みして、急な坂を登り始めると、いままですに進んでいた途は俄かに方角を転じて東北になる。その代り、もうあの汚れた土埃はすっかりなくなって、山は一面に低い松柏科の常緑樹で被われている。それに天は青く、空気はからりとしてなんと爽快である。しかし、この高いところにも、段畑が作られ、山ふところには南坪という部落が見下ろされた。道は山の脇に沿って曲り、しだいに頂上に近づいて行く。とある尾根を廻ると、緑で被われた山頂に白いラマ塔が急に現われる。それからもう一度尾根を廻ると、今度は突然、山ふところに小さい平地が開け、天龍寺の伽藍がみえてきた。

そして、その右手の山腹に幾つも石窟が並んで、口を開いているのが望まれた。寺も石窟も西南に向かつている。時刻は丁度一時半。山麓から約九キロ、晉祠鎮からは約二〇キロという、それを一気に登ってきたのだから、かなり強行軍であつた。左脇小門から内に入る。まず前殿、それから奥に大雄宝殿があつた。中庭には十基ばかりの古碑が並んでいたが、中でも一廻り大きく人目をひいたのは、北漢の廣運二年（九四五）に立てた「大漢千佛樓碑」であつた。

石窟は山の頂きに近い九合目ぐらいのところにある。すぐに山に取り付いたけれども、白い、またあるところでは紫色の砂が崩れてすべってくる。頂上に近い傾斜が急なところは、ぼろぼろの砂だ。やっとまばらな灌木を頼りにして、這うようにして登つていった。

石窟は一つの谷によって、東南と西北との二群に分かれている。どれも小ぢんまりした石窟である。砂崩れに足を滑らせながら、大急ぎで次から次へ見て廻つた。仏像は一つとして満足なものはなく、実に徹底的な破損を受けていて、痛ましい限りである。そのうえ第九窟前の楼閣も無惨に崩れていた。これは極く最近のことで、われわれの全然予期しなかつたことである。日が短かいので、ゆっくり見ている暇はない。一窟から一窟と廻つたが、第十七窟あたりまで来て、思い切つて一気にかけ降りる。降りてしまつてからも、何かと石窟のことが

気になって、去りがたい気持ちであった。

四時すぎ、再び馬上の人となって下山を始めた。しばらく下ったところで、山合いから汾水の流れを遙かに望んだ。と、いままでの急しさから突如として解放され、初めて悠然たる心持ちになった。六時半、晉祠鎮に帰着。

十二月十六日

午前中は晉祠の見学である。町の通りも水の流れは豊富で実に美しいが、堡の城壁から外に出るとなおさらである。

晉祠の南に晉溪書院という一廓があるが、今は全く廃墟となっている。その南に奉聖寺がある。七層の白い甍塔が朝日を受けて輝いている。門は閉まっているので脇の小口から入ると、松柏科の常緑樹が茂っている。ここは唐の尉遲敬徳が自分の別墅を喜捨して寺にしたといわれるが、円い山を負い、清らかな流れをひかえて、いかにもその伝えにふさわしく思われた。無住らしく、荒れ果てている。案内もなしにごみごみした塀の間を廻って塔の前に出たら、犬が吠えて寺男のようなものが出てきた。塔へ入って、暗い階段を登り頂上に出てみた。塔は清の乾隆年間の建造といわれ、新しいものであるが、眺望は至ってよい。北には晉祠の樓殿が手に取ることく見下ろされ、西には懸甕山が間近かに迫っている。目を東の方に転ずると、町を隔てて汾水がうねり、東北指顧の間に太原縣の城壁が望まれる。

晉祠は町の堡壁とは別に、西にはりだした牆壁によってかこまれている。東面した景清門がその正門である。門を入ったところに広場があつて、晉祠に立ちよるバスの発着所になっている。清源へ行くには町に入らずに、祠の裏、懸甕山の裾を通って、南へ走るのである。

広場の正面に勝流という額を掲げた樓閣がある。これをくぐって中へ進むと、境内は到るところに廟宇があり、樓閣があり碑石が立ち並んで、もはや一日半日の調査では不十分なことを知った。正殿たる聖母殿―これこそ祠の本殿である―が北宋の建築であるのみならず、その前の鉄獅子や鉄人も北宋の製作である。飛梁その他も、『水経注』以来の古い遺制を保っており、北側の碑亭には唐の太宗の晉祠銘を刻した碑も巖として健在である。鉄人や鉦獅子に興味をひかれて時間を過すうち、聖母殿の建築その他を充分に見る暇がなくなった。調査に忙しかったが、境内は静かで空気も清らかであった。葉の落ちてしまった木立、幾百年もたつたかと思われる老柏、その間を綴って人影のない建物が立ち並び、明るい太陽のもとに全てのものがくっきりと鮮かにみえた。

泉源は本殿南の難老泉にある。驚くべき多量の水がここから滾々として湧出している。水の町晉祠鎮を流れるすべての水は、みなここに

源を発する。泉から出た水は、まずこの木立、建物の間をせわしく音をたてながら流れ、おのづと廓外に出て行くのである。この山、水、樹木を取合わせた晉祠のごときは、乾燥した華北には稀れなところである。山西第一の幽境、華北屈指の勝地に挙げられているのは当然である。

午後は太原へ帰る途中、風峪の華嚴經洞をみる予定であった。しかし、その位置が誰に聞いてもなかなかわからず、途中でたびたび風峪の方向を聞いたあげく、やっとその位置だけはわかった。道路から西口に入って埃っぽい悪い道を進み、ついに大きな谷の入口に到達した。ここから少し入っていくと河原にぶつかり、自動車は通れなくなってしまった。徒歩で、石ころの多い河床を少しばかりさかのぼった。すると、右手の狭い谷間のやや高いところに一むらの松柏が見え、その間に寺らしいものが認められた。

狭い谷を通って松柏の茂みにたどりつく。山門は閉ざされたままになって荒れ果てている。その脇を通りぬけ、中門を入ると、正面に二層造りの本殿がある。静かな境内である。和尚も住んでいないらしい。建物もあまり荒れていなかった。庫裡から寺男が出てきてあつい湯を茶碗になみなみと汲んでくれた。のどが渴いていたので、一気にそれを何杯ともなく飲んだ。本殿の前、階段の下に大きな唐碑が目立っていた。本殿の後方、岩山の上に皇姑洞という小さな洞穴があり、その西の小高いところには八角の経幢が立っていた。これには、文徳元年（八八八）という唐の年号が読まれた。そのうちに、この寺が太山寺という寺だとわかった。全く予期しない寺であった。風峪の経洞は、もつと谷の入口に近いところにあるらしい。残念だけれど、もう時間も遅いので諦め、一通りこの寺を調べて帰途についた。

谷を出てもとの街道を走る。はるかに太原の城壁が大きく堂々と見えた。汾水の盆地は平たく、廻りの山々も低い。ただ雙塔寺の塔だけが、空を突いて夕日に赤く輝いているのが遠くに見えた。既に五時を過ぎていたので、空気は俄かに冷たくなってきた。

十二月十七日

午後を博物館で暮す。六朝の造像銘を筆字したり、土器の写真を撮ったり、実測をしたり、元代の墓甕の拓本をとったりした。

夜は第二市場の中をあさって、王老好^{ワンラオハオ}という小料理屋を発見した。入ってみると、北京料理を標榜する新開の店であった。なかなか繁昌^{フンチヤウ}していて中国人で一杯であった上、山東音のキーキーという発音も聞かれた。料理はかなりよかった。白酒もよかった。赤い紙に山鷄^{サンチ}の特別料理ができると書いてあったが、注文するとあいにくこれは品切れの由。

ぶらぶら歩いて、先日傳公祠へ呼んだ拓本屋の家を捜してみた。だいたいの見当と番地を聞いていたので、わりに早くわかった。戲院などのある狭い胡同を曲り曲がって奥まった露路の奥、寄り合い世帯の一廓にかの拓本屋を見出したのであった。相当の年配で、話もわりにわかる。多少気骨もあっておもしろいおやぢである。晉祠銘の碑や傳公祠の碑の拓本を幾らか捜し出し、ついでに「五臺聖境」の拓本などを買った。そうして明日博物館の方へ来るように約束した。

十二月十八日

今日も朝から博物館へ行く。蔵書の方も一通り見たが、別にこれといったものもなく、また殆んど整理もされていなかった。ただ前山西兵站總監黃國梁（号紹齋）旧藏という明版書の類が光っていた。しかし、総計十五万冊といい、普通の書物は一応揃っているらしかった。しばらくすると、拓本屋の紀が弟子を二人つれてやってきた。早速墓誌銘などを拓させる。それから昨日書き残した土器の実測をしたり、瓦当の拓本をとったりした。ところが、博物館の省公署への移管がいよいよ明日にきまったので、陳列室は今日中に見てくれとのこと。まことにあわただしい思いをしながら、忽々たる最後の調査をした。

十二月十九日

ゆつくりと十一時近くまで寝た。今日は少し暖かいようだ。もう太原も今日一日というので、崇善寺へ洋車を走らせた。この寺は博物館のすぐ西北にあつて太原第一の巨刹である。現在の住持が非常に徳望があつて、信者が多いのだそうである。行ってみると、なるほど掃除も行き届き、僧侶も少なくない。後方には孤児をやしなっているという。明初の創建、建築も特に古いというわけではないが、門前の鉄獅子には洪武二十四年（一三九一）の年号があり、大悲殿の観音三大士像も秀作である。

夕食までの時間を利用して、新民市場の骨董屋を廻った。軒並みに古物屋とも、骨董屋ともつかぬものがならんでいるが、とくにこれと
いうものもない。

臨汾滞在

十二月二十日

朝六時半に起きる。まだそとはまっ暗だ。洋車を連らねて駅へ向かう。首義門の大通りは早くから随分賑やかである。まっ暗な中を洋車や大きな荷物を担いだ人がどんどんと急いで行く。みんな同じ列車をめざしているのであろう。駅前の広場はそれらの人で一ぱいであった。列車は定刻八時に出た。二、三等混合列車である。二等車は半分しかないので超満員。車は冷えきったままで、まだスチームが廻りきらない。水蒸気が窓ガラスに凍りつく。意外にも貨車を改造した食堂車がついていた。

九時近くになって、やっと太陽が上る。太陽が上ると、今度は霧だ。灰色の霧があたりを包んでしまう。ただ線路近くに麦畑の青い芽が見えるばかりである。麦の芽は一寸ほど伸びている。大同から来た目には全てが潤いのある景色にみえる。霧が晴れると、麦畑は広がり、木々がみえ、村落が続いた。

榆次、太谷、祁縣、平遙、どの県城もみな堂々たる城壁で囲まれている。太谷城内には白い甌塔が聳えていた。多分、宋ごろのものであろう。平遙は汾陽支線の分岐点である。このあたりはただ県城が堂々たるばかりではない。村落もみな頑丈な甌築の壁を構えている。しかも、張蘭鎮附近からはこういった壁のある村落がますます多く、沿線の左右に連続している。それから沿線には墓地も多い。畑の中に土饅頭が並び、それに石碑や石碑を被う甌築の碑亭や、また僧侶の遺灰を納めた甌築墓塔が立ち並んでいた。

介林から、左手遙かに山が現われる。義棠鎮から黄土の丘陵地帯に入る。汾水がこれを切り開いて流れ、線路はその縁に沿って進む。展望はきかない。黄土の崖っぷちと緩やかな水の流れ。ときどき崖縁に穴居の部落が見える。丘かげはさすがに氷を結んでいるが、一部分は解けて緩やかに流れている。霍縣に至って、少し平野ができてくる。東の方にやや遠のいて、険しい山かげが続いている。そのうち一きは高いのが有名な霍山であらう。趙城を過ぎると盆地はさらに広くなる。洪洞に近づく、あちらこちらに水田が作られているのが見えた。

しだいに暮色は迫って、ついに暗くなった。七時三五分、臨汾着。まさに定刻である。この列車は臨汾止りである。同蒲線南段、つまり

太原蒲州間四七七キロは、どうしても臨汾と運城でのおの一泊して車を換えなければならぬ。列車の速力は遅いし、昼間だけしか運転しないからである。

十二月二十一日

朝食後ゆっくりして、もとの平陽府の文廟へ行ってみた。境域は広く、大成殿を始め、主な建物は殆んど残っているが、全て改修されている。午後は城内の古蹟を見て廻った。まず県公署へ行つて、縣図と縣志とを見せてもらった。民国二十二年の『臨汾縣志』はまだ見たことのないものであった。

初めに城内中央の鼓樓―大中樓という―へ行つたが、あいにく鍵がかかっていたので、西南隅に近い大雲寺へ行く。ここには方形の五層塔があった。第一層には高さ五、六メートルもある大きな鉄の大仏頭が安置されていた。一名鉄佛寺はこれによるのである。

これから南門へ廻り城壁の上に登った。さすが山西中部の要衝平陽府だけあって堂々たる城壁である。一辺二キロ、おの中央に一門が開き、それが二重の甕城によつて嚴重に固められている。ただ東門だけは東関との交通が頻繁なので甕城が取除かれていた。臨汾の平野は広い。ゆるやかな汾水は西壁のもとを流れ、いわゆる藐姑射^{はこや}の連山が西の方遙かに霞んで見える。南方はただ平らな畑地、そのまん中に堯帝廟がぼつねんと立っている。

南門の中に「蒼頡造字處」の碑がある。黄帝の臣、蒼頡が鳥獸の足跡を見て漢字を發明したところだといふのである。太古茫漠の情に包まれて暫く茫然とする。あたりは民家もなく荒れ果てて、甌が散らかっているだけである。碑面には「蒼頡造字處、乾隆四十九年甲辰仲秋邑令河間李早榮書」とある。もともと南門外の倉聖祠にあり、のち倉聖祠が南門内に移されたとき、碑もまた移されたといふが、その祠には軍隊が駐屯していたというから、事変に際してすっかり破壊されたのであろう。城門の附近でしきりに手のひらをおした甌を見た。これはこの城壁に使つてあるらしい。新しいものと思うが、山西南部でしばしば遭遇した。この地方の特色あるものとみえる。例の格子文のある元ごろの甌は、大雲寺の境内で数個採集した。

それから少し東の方へ出て南禪寺へ行つた。寺域はかなり広いが、仏像にも建築にも一向古いものが見当らなかった。裏口へ出ると、長さ一メートルばかりの石槽が転がっていた。注意すると、大きな石柱を横倒しにし側面を大きくえぐつたもので、「大金平陽云々」という大

きな字が見え、大定十一年（一一七一）十二月という年号もかすかに読み取られた。金代の墓塔らしい。完存はしていないが、臨汾城内最古の金石文である。いったい臨汾は歴史の古い土地でありながら、これという遺物がない。古来しばしば戦乱の巷となり、また地震の災害が多かったからであろうか。

帰りに、関帝廟や縣の文廟へも行ってみた。関帝廟は咸豐年間（一八五一—一八六一）の建築であるが、簷の彫刻など新しいものとしては上出来である。縣の文廟はすっかり壊れていた。

十二月二十二日

午前はずまず大中樓へ行った。高さ一〇メートルばかりの台上に建てられた三層樓である。城内のほぼ中央にあるので、非常に見晴らしがよい。上に金代の鉄鐘があつたが、あまり立派なものではなかつた。

それからまた南禪寺へ行った。実は昨日寺男に大定の墓碑を起こすよう頼んでおいたからである。しかし、行ってみるとちつとも手がつてなかつた。どうしたのだと聞くと重いからだという。附近の人を動員してようやく引起こし、拓本もとってもらつた。

午後はじめて城外に出た。南門を出て大道を南へ一気に堯廟までつっ走つた。堯廟を見るのはあとにして、さらに南して王庄へ、それからやや細い馬車道を西へ入ると伊村という部落がある。縣城から丁度八キロばかり。ここを堯帝の故里だという。小さい土城に囲まれた平和な部落である。門を入ると村人がもの珍らしそうにぞろぞろと後をつけてきた。土城内の西の端に玉皇廟がある。人に聞くと、これが堯帝廟だそうである。中に入っても何もなかつた。ただ傍の一室で棉を弾いているのが目に止まつた。南門の外に出ると小さな黄土の壇があり、その上に「帝堯茅茨土階」という碑が立っている。こここそ堯帝の宮址であつて、古書に「茅茨きらず、土階三等」とあるところだという。それで、この茅はとげの先が二つに分かれていないそうである。

いうまでもなく、臨汾は古えの平陽であり、堯帝の都と伝えられるところである。いったい、いつごろから始まつた伝説かは知らないが、漢代の文献にも見え、二千年來伝えてきた話である。茅茨土階のほかに、県城東北の康庄堡には堯の世に老人が「帝徳いずこにあらんや」と鼓腹撃壤したという康衢があり、また浮山縣境の堯陵村には堯の陵もあるという。もちろん、これらは単に言伝えであり、進んでいえば、いずれも後世の仮托に過ぎないのではあろう。けれども、これだけ次から次へと堯帝の遺蹟に引き遇わされると、全く茫漠たる太古史の中

に行くのを感じる。

それからまた一路南へ走って、襄陵縣境に近い金井村へ行つた。ここには大きな中頂廟があり、近郷近在の信仰を集めている。なかなか立派な廟で、本尊は複雑な武神像、玄天大帝像という。脇に二人の武装した侍者を従えている。しばらくすると三人の道士が現われた。どうかもつと修理ができるよう御尽力願いたいという。

ここはこのくらいにして車をめぐらし、一路堯帝廟へ急いだ。平坦な土地に、ただ大きな廟だけが巍然として聳えているのは寂しい。樹木はない、附属の建物も大部分なくなっているらしい。広い境域を囲んだ低い塀が広がっているだけだ。実に埃っぽい殺風景なありさまである。太平天国の被害を受けているため、建築もことごとく新しい。それに以前には飛行隊が駐屯していたので改造されたようで、さらに荒廃していた。遠くから見た立派さに反して、近寄ってみると痛ましい姿であつた。主な建物は五鳳樓と本殿とで規模は大きい、近寄ってみると更にみじめであつた。そのほか堯井だとか、八卦亭だとか、それほどの興味を覚えず、ただ広い境内をむやみに歩き廻つた。碑記として古いのは元の至元六年（一二六九）「大元勅賜堯帝廟碑」が注意に上つただけである。旧暦三月から四月にかけて廟会があり、それには参加者が非常に多いという。その間に開かれる大規模な馬市はとくに有名で、一年中でもっとも堯帝廟が活気付く時である。

平山龍子祠

十二月二十三日

朝八時十分出発。今日は汾水の西へ行く。目的は龍子祠である。城の西門を出て、汾水の木橋を渡り、坦々たるトラック道路をまっ直ぐ西に向かう。行く手には、右にやや高い藐姑射山を望み、左に低い平山を見る。汾西に来てまっ先に気付いたことは、汾東に比べて部落の多いこと、そうしてそれらが殆んど牆壁に囲まれていないことであつた。まず劉村について小憩する。ここには立派な三元廟があるが、建築は清末のものである。

劉村から南、金殿鎮へ行く途中は両側一面に水田が開かれている。十二月というのに、田の間にはなみなみとした水が流れていた。金殿

鎮は汾西第一の部落である。ここにもやはり牆壁は築かれていなかった。民家の構えは立派で、短かいながら町並みをなしている。金殿鎮の部落の中にも、やはり清らかな水が音を立てて流れていた。村はずれには、この豊富な水を利用して碾磑みづうずが架せられ、各種の製粉が行なわれている。ここから西の方を見ると、平山はすぐ目の前に当り、目ざす龍子祠はすぐ麓にある。

平山は平水の出るところである。平水は兩岸数百頃の田を潤おしつつ東に流れて汾水に入る。これがそもそも平陽という名の起りである。もちろん、いまの平陽―臨汾城―ではない。むかしの平陽は文字通り平水の北、丁度いまの金殿鎮のあたりにあったといわれている。

金殿鎮から龍子祠まで道を西南にとって進む。その間の距離はいくばくもないが、蘭村、蘇村、下當村、河南村、河北村と部落が続く。道端はどこにも、きれいな水が溢れるように流れ、それを溯って行くと、道は少しづつ上り気味になって、ついに平陽盆地のはし、平山の麓に着く。この流れに沿ってあちこちに水車小屋があり、中に入ると大きな碾磑が幾つも廻っていた。蘇村では、農家の簷下に、文字は見えないが、八角の経幢の柱石が横たわっていた。

午後一時になって龍子祠のある審院村に入った。この部落は山の斜面に作られ、祠はその東南のはずれにあった。ここはまうしろに近く山をひかえ、清流に取り巻かれた静かな一廓である。晉祠に比べると遥かに規模は小さいが、幽邃という点ではこちらが勝っている。しかし、現在は無住に等しく、建築はひどく壊れていて、復旧などはちょっと望みがたい。いろいろの都合で時間がなく、龍子祠の取調べは大急ぎでしなければならなかった。碑記の類はかなりあるが、金の大定十一年（一一七一）のものをもっとも古く、元のもものが五つあっただけで、他にはとくに古いものはないようであった。

しかし、かねて書物の上でしか知らなかったこの泉源―実際の泉源はこのうしろの山にあるらしい―劉淵ゆかりの地をきわめたことはこの上なく嬉しかった。いうまでもなく劉淵は匈奴族の出身で、後漢末、中国に進出して独立し、平陽に都をおいた。そのとき築城を助けたのが、この泉源の龍神の子、龍子なのである。あわただしい調査をへてもう一度ここにくる機会があるであろうかと考えると、実に去りがたい気持ちであった。

帰りは思いきり馬をとばせ、また車を走らせた。汾水に近づくと対岸にそばだつ城壁が夕やみの中に、ことのほか高く感ぜられた。まことに要害堅固な城壁である。

運城塩池廟

十二月二十四日

今朝は八時三〇分発の運城行きに乗るのだから割合にゆっくりした。列車はなかなかこむが、一、二等車が一両ついているのでありがたい。駅を離れると、やがて右の窓に一昨日行つた堯帝廟が現われ、左の窓に金井村の中頂廟が現われた。平山もはっきりと見える。天気は快晴だ。

暫く汾水と遠ざかっていたが、史村附近でまた近くなった。そうして汾水の作った黄土のはざまを進んで行く。やがて、やや広い盆地に出る。列車は相変らず段丘の下に沿って走る。候馬鎮でいよいよ汾水と別れる。汾水は南の稷山山脈に障ぎられて西に離れ、鉄道は一路南進する。汾水のこの屈曲部は東から滄水を受け、かなり大きな盆地になっている。候馬鎮はその中心である。ここから汾水に沿えば西のかた新絳、稷山、河津方面に到り、滄水を溯れば、東のかた翼城、陽城、沁水方面に到達する。また晉南における交通の一要衝である。

稷山山脈に入ると、俄かに黄土の地隙は深くなる。西側の段畑が見上げるように高くなってくる。そしてそれがまた禮元あたりからなだらかになって、ようやく平野が展開し、聞喜においてついに河東盆地の端に達する。これからして平野はますます広がるが、東にはいつも山が見える。これが中條山脈である。この辺では中條山脈のことをヴォンティアオサンと発音する。

左手に安邑の城壁が近づき、その一隅に白色の甄塔が見える。塔のまん中に大きな亀裂が入っていて、いかにも危なそうである。だいたいの宋塔らしい特徴が車中からうかがえる。まもなく列車は運城駅に入った。五時十分である。町は駅の東にある。運城は県治ではないが、立派な城壁が築かれている。いうまでもなく、ここは塩池のために発達した産業都市で、塩池の製塩とその運搬によってできた町である。近年海塩の進出で衰えたようにいわれているが、まだなかなか活気がある。しかし、町幅は狭く、どことなくむさくるしい感じのする町である。繁昌の程度はちょっとした県城より上であろうが、城としての品格はやはり県城ほどではなさそうである。

夕食後、町に出たが、城内の中央には、屋根や簷に複雑な装飾をもった鼓樓と鐘樓とが聳えている。町の繁華街というところはこのまわ

りで、雑貨屋には年画も売っていた。いよいよ押し迫った年の暮れである。しかし、北から来たものにとってはわりに暖かい。今年は特に暖かいのだそうである。

十二月二十五日

昼飯を市場の飯屋ですましてから、しばらく露天の古物屋をあさったが、まことに貧弱な古物市であった。それから塩務管理局へ行き、塩池廟を見学した。

廟は城の南門から一キロ余り、塩池牆壁の中にある。前に牌樓をひかえた小さい北門から入ると、そこは丁度境内の西北隅で本殿の裏に当る。本殿は三棟の重簷入母屋の豪華な建物で、塩池神を中央にし、左に條山神、右に風洞神をまつている。もと神像があったそうであるが、今はなく、ただ木位のみが立っていた。本殿に接して饗殿があり、庭を隔てて、戲台があり、その下をぬけて行くと、そこに大門があつて、中に多くの碑が立ならんでいた。そのうち貞元十三年（七九七）の唐碑を見出したのは嬉しかった。さらに南に進むと大きな樓門が聳えていた。これを海光樓という。

この海光樓を一步出ると、たちまちひろびろとした風景が展開する。広い塩池が低く開け、その向こうに中條山脈の黒い影がそそりたつている。池には白い堆積物が点々と望まれ、まるで塩のように見えるが、実は芒硝の山で、この塩池ではその処分が一番厄介なのだそうである。海光樓の前は甃を敷き詰めた台になっていて、その端に「地宝天成」の額が上った牌樓があり、ここから緩傾斜の広い道を下る。降り切ったところにそくばくの甃台があり、その上に牌樓と二層の樓閣がある。牌樓には「舜彈琴處」の額があがり、樓閣は歌薰樓という。

その昔、舜帝は高樓の上で琴を弾じ、「南風の薫れる、我が愠^{いかり}を解くべし」と歌った。そうして、万民はその徳に化し、天下に昌平の気が漲ったという。ここで南風というのは中條山から吹いてくる風である。これがないと、当地の塩はうまく結晶しない。だから適当な南風はその製塩に欠くことのできぬ一要素なのである。

やがて境内で一人の拓本屋を見付けたので、この廟にある石刻全部の拓本を作るように頼んだ。有名なものは絶えず需要があるので、こういうところでもそれを商売に始終拓本をとり廻っている男がいるのである。けれども、全部の拓本だと四、五日はかかるがといって引受けてくれた。

夜、町に出たついでに拓本屋へよつてみた。相変わらず路地の奥の相住まいで、戸板の寝台を縦横に並べたようなところであった。二、三持合せたものを見たが、別に欲しいものはなかった。しかし、話をしている中に安邑の房公祠に石刻が集められていること、虞郷の山中に隋以来の寺のあること、蒲州附近では二賢祠に碑があることなどを聞いた。

臨晉をへて河津へ

十二月二十六日

今日は臨晉行き。北門に近い関帝廟が乗合バスの発着所である。予定よりもよほど遅れて十時過ぎに発車した。

北門を出て鉄道を越え、道はいくらか上り気味となつて、いつとはなしに高爽な原野に出る。振り返ると、運城の町が遥かに太陽を受けて輝やいている。車は西北へ西北へと走り、いつか知らぬ間に干上った涑水を渡り、行く手に低い丘陵の峨嵋嶺が近づいてくると、早やくも車は猗氏縣東門に達した。この間一時間の行程である。東門から西門を貫く中央の大通りは、埃っぽいながら、人家が立ちこめ、南側から槐樹の古木が頭上にさしかかっている。そうかと思ふと車でもぶつかりそうなく脇に、物さびた経幢が立っており、また北の一隅に二基の甍塔が聳えている。なんとなく、さびのある町である。東門に入る前に二、三の古墳らしいものを認めたが、西門を出ると、低い土饅頭が二、三十基散在しているのが見えた。漢代の古墳群であろう。

猗氏、臨晉間はいくばくもない。城門を出ると道はやや西南に向かうが、県境の嵯陽鎮を過ぎると、一路西方に直進し、やがて臨晉の城壁が行く手に現われた。今日は全体に水蒸気が立ち込めて視野がきかぬが、右手には東西に列なる低い峨嵋嶺がなおも続き、左手はいくらか下がり気味になつて、干いた原野が果てしなく続いているようであった。東門を入ったところで車を下りた。臨晉は実に荒れ果てた町である。満足に家並みの見えるのはただ東西の大街だけらしい。裏通りへ廻ると、全てが廢墟のようであった。間もなく河津へ行くトラックの便があるという。それで臨晉は帰りに見ることにして、あわてて路傍の飯屋で昼食をとったが、時は既に一時を過ぎていた。

河津行きのトラックは三台であった。二時に出発。西門を出て、徐々に峨嵋嶺を上った。上り詰めたところは黄土の台地であるが、いわ

ばこれは稷山山脈の一部なのだ。途中、孫吉鎮というやや大きな部落があり、それを過ぎると榮河県への分岐点があった。東北にぼんやり霞んでいた孤峯山がしだいに近づいてくる。平坦な原野の中に孤立した円錐形の山である。介子推がみずから焼け死んだという介山はこれだといわれている。やがて孤峯山の西麓に近い高村に着いた。ここから萬泉への道が分かれているが、その距離はわずかに六キロである。路傍に立派な廟があった。あちこちで雁の群れが畑に下りていた。

孤峯山が砂塵のあとに薄れて行くころ、萬泉の北境、王李村を越え、いよいよ河津県の南張村に入った。この辺からやや下り坂になる。新しい自動車道路は段畑を直角に切り通したもので、まだ幾らか階段状になっている。それで車はがたがたと大きく揺れながら下って行く。このがたがた道路は、かの文中子の故里と伝えられる通化鎮あたりへ達すると、ひとまずなくなって平地になるが、間もなく小梁村を過ぎるころ、また同じような坂路になり、左右に新しく深い地隙が現われる。道の両側は黄土の垂直崖がそそり立ち、削り残った黄土柱が鋭い角を天に向けている。そこをぐりぬけて丘陵を下り切ると、汾水の縁に達するのである。

汾水は満々たる水をたたえ、河縁に迫っている。目ざす河津縣は河の北、段丘の下にこぢんまりと築かれている。汾水の木橋を渡るところは、ようやく夕闇が迫ってきたが、県の東門に達したときはすっかり暗くなった。

十二月二十七日

わざわざ河津縣までやってきたのは、なんとかして禹門口を見ようと願ったからである。運城でまだ治安がよくないと聞かされても、なんとか一歩でも近寄ってみたいという気持であった。ここへきてもやはり駄目とわかったが、せめて遠望でもしたいという願望は消え失せない。

午前中、県公署に行くと、それに隣接して、この県の出身というト子夏、司馬遷、王通（文中子）をまつた三賢祠や、蕭何をまつた鄴侯祠などがあった。鄴侯祠の境内には唐の儀鳳二年（六七七）の碑が二つと宋の政和二年（一一一三）の碑が一つあった。河津縣はわりに荒れてもおらず、思ったより落付きもあるのが、この上なく嬉しかった。中央鐘樓の附近には露天の店屋などもあり、ゆっくりとそれを見て廻っている人々の姿もあった。南街には立派な薛文清公の祠堂があった。明初の大儒薛瑄は本県の出身で、ここがかれの故宅でもある。午後は馬で城外へ出た。城の北は一連の河成段丘である。それを雨水の侵蝕で幾つにも切断している。禹門口を遠望するために、その一

番西の端の岡へ上ってみた。今日は風のために砂塵が多く、全く遠望がきかない。東西から迫った黒い影が狭間をなすあたりを、禹門口と認めて満足するより仕方がなかった。もし晴天であれば、舟の往来するのが見えるという。目を西に移すと、黄河の流れが見え、東岸に発達した砂丘の白く連なっているさま、その南に汾水が曲りながら流れこんでいるのが認められた。

山を下りて東辛封村という部落へ向った。ここは子夏の故里だといわれ、その祠堂もあれば、村はずれにその墓もある。あまつさえ、子夏の子孫だと称するト姓の家も二戸ある。次に西辛封村に廻った。ここは司馬遷の故郷だという。村の入口に「漢太史公司馬遷故里」という立派な碑が立っているし、ここにもまた司馬姓を名のるのが四戸あった。またこの北方の康家荘にはその墓もあるということがわかった。子夏の方はともかく、司馬遷の故郷はこんなところにあるはずはない。かれは黄河西岸、陝西側龍門の人である。帰りには南に廻って太陽堡と太陽村とを通過した。漢の皮氏縣のあとと伝えられているが、それらしいものは認められなかった。

十二月二十八日

東郊に唐代の勇将薛仁貴の廟があるというので、それを見に行く。東門を出てわずか六キロほどの間であるが、六つばかり部落があった。どれもみな段丘の麓にあり、前は汾水のきわまで蘆葦の原であった。風もない冬の朝で、すっかり霧が立ち込め、廟のある修仁村についてころには、二、三間先が見えないくらいであった。馬を引いて、その名を白虎岡という裏山にかけ上ってみたが、廟は黄土の崖を掘りぬいた一坪あまりの貧弱なものでがっかりした。その中に仁貴夫妻と称する小さな泥像がまつてあった。古い碑もなく、村民も一向に来歴を知らない。ここにも薛姓名を名のるのが二戸あり、墓というものにも案内されたが、あまり香ばしいものではなかった。

城内に入る手前で整然たる一区劃の廟を見たので、降りて見ると臺頭后土廟という荒れ果てた廟である。次にまた一区劃の寺があり、これが覺城寺であった。やはり荒れてはいたが、なかに八角十三層の輦塔が聳えている。塔は新しいものであったが、その前殿に安置された鉄仏を見ると、やや古いように思われた。鐘樓に上ってみると、崩れかかった建物に銅鐘が懸っているので驚いた。よく見ると、北宋天聖七年（一〇二九）の年号が鑄出されていた。

午後は西街の鉄佛寺へ行ってみる。非常に荒廃していて民居となり、何も見るべきものはなかった。それから、少し暇ができたので城北の岡に登った。これは臥麟岡、あるいは麟島、また九龍岡といわれている。要するに、黄土の段丘で縁辺はひどく浸蝕され、その残った岡

ごとに朝天宮とか、天神廟とか、帝王廟など九つの廟が立っている。上に出ると一望平坦の台地である。諸廟は県民の信仰が厚く香華が絶えないありさまであるが、現在の建築はいずれも同治以後で見るべきものはない。

砂塵は今日も止まず、また夕方にも近かったため、禹門口の遠望はやはりだめであった。ただ西の方遙かに夕日の沈む陝西の山々を見、南の段丘の向うに稷山の姿を一きわはつきりと夕空に望むのみであった。城内に戻るともう日はとっぷりくれていた。

臨晉と猗氏

十二月二十九日

今日は丁度臨晉行きの便があるというので、それに便乗することにきめた。朝九時出発。九時といっても日の出は遅く、まだ薄暗かった。河津から臨晉へ行くには、柴河を通った方が近いのであるが、今日もまた往きに通った道を走った。町の中央に高い台の上に築かれた鐘樓がある。登ってみると、非常に形のよい鉄鐘が懸っていた。銘には北宋政和八年（一一一八）の年号があるのが珍しかった。鉄鐘でも北宋のものというとな少ない。その足ですぐ県公署へ行く。民国の『臨晉縣志』を開くと、この城内には多数の古碑類を集めていたらしく、それらは一括して鐘樓の上にあるはずだという。今見てきた鐘樓である。不思議に思って、また鐘樓へ上ってみたが、どこにもそれらしいものはない。いろいろ捜したあげく、結局全部樓台の北側へ押し落されていることを発見した。その中には破れているものや、ほとんど土中に埋没しているものがあつた。戦乱中における古碑の運命として是非ないものと思うが、とにかくなんとか至急復旧保存の途を講じたいものである。またあるところへ行くと、立派な北魏の碑があつた。有名な密雲太守霍揚の碑である。それから新民中学校に行ってみると、半ば地中にうもれた経幢があつた。

最後に北の城壁に向かい、東北隅の荒れ地を歩いていると、草むらの中に立派な石仏がぼつねんと立っていた。裾は地中に埋もれているが、恐らく全長二メートルに近い仏体である。様式の上からは北齊佛と認められる雄作である。附近には台座の破片も転がっており、それには刻文も見られた。

ここはもと慈雲寺という寺のあったところである。僅かの時間に走り廻って、これだけのものを見たので、すっかり疲れてしまった。しかし、思いのほかの収穫があったわけである。

十二月三十日

臨晉は半日で切り上げ、早速午前のトラックで帰ることにきめた。朝早く立てば途中で猗氏に立寄り、今日中に運城へ戻る見込みがついたからである。トラックが出るまで、少しの時間を利用してまた石仏の写真を撮りに行った。九時四〇分出發。車の上は風が強くて寒かった。どうしたものか意外に時間をくって十一時猗氏に到着。

大通りから裏に廻ると、路傍に大きな釣鐘が転がっていた。見れば金の大定二十九年（一一八九）の銘がある立派な鉄鐘である。この町でも家並みがやや整っているのは東西の大通りだけで、裏には空地や荒地が多かった。

県公署へ行き、それから文廟へ行く。そこには西廂に唐の則天時代の釈迦涅槃図を刻した石碑が保存されてあった。暗い物置きの中で蠟燭の光によって見ると、その像は非常に立派なものだった。それから北の城壁に近い双塔へ行く。ともに方形七層の甍塔で非常に荒れているが、長安の雁塔に似た唐代の面影を残している。二つの塔の中央突き当りに、馬王廟と俗に呼んでいる唐の馬燧をまつた廟がある。この廟の本殿に使った礎石や石柱がなかなか立派で、唐あるいは六朝時代にも溯るものであった。前方には二つの鉄人があり、一つには北宋の政和三年（一一一三）の、いま一つには金の天会十五年（一一三七）の銘があった。晉祠の神像とともに珍しい例である。この境内にもやはり大きな金代の鉄鐘が一つあり、それには承安四年（一一九九）の銘があった。

三時半頃、偶然にも運城行きのトラックが通過したのを幸いに、これに便乗して運城へ戻る。

蒲州での越年

十二月三十一日

いよいよ今日は大晦日だ。終点蒲州駅に向かう。七時十五分に起きる。外はまっ暗だ。車が遅れて、八時半の発車。列車は均一の三等車

ばかり、車内にはストーヴの備え付けがある。

一路中條山脈の麓に沿って西南に走った。車窓には絶えず五、六百メートルの山かげが付きまとう。解縣では城壁の西に接して関帝廟がすぐ近くに見えた。虞郷をへて蒲州駅へ入る。ときに十二時十五分。寂しい駅だ。蒲州から先は中條山脈が急に低くなる。

駅から城内までは三キロばかりある。降りた客は十五、六名ばかり、みな歩くらしい。真昼の太陽はぽかぽかと暖かく、まことに小春日和である。歳末といえど内地でももう少しは寒いかと思ひながら、平坦な道を進む。左右は青々とした麦畑である。道は西北に向かうので、北の丘の上に見えていた普救寺の塔が東へ一回転した。東関を入ると、その中には至るところ蘆荻の生えた水溜りがあり、雁も下りていれば、鶴もいた。向うに東門、鼓楼、鐘樓などが遙かに城壁から頭を出している。

昼飯後少し城内を歩いてみた。城内はというと全くの廢墟である。寺もなく、廟もなく、文廟もあとかたなく崩れ果てて、ただ二、三の碑が立っているのみであった。縣公署も壊れた甎と瓦の堆積ばかり、現在の縣公署には辛うじて残った関帝廟が利用されている。町は荒れ果てて、本通りに少しばかりみすばらしい食い物屋が並んでいるほか、一面の荒地である。湿地にはソーダが吹き出し、水溜りには鳥が泳いでいる。それに麦畑が青々としている。町で気がついたものに竹籠があった。この附近に竹の出るところがあるらしい。聞いてみると、それはわずかに趙伊鎮附近だけということだった。

昭和十六年一月一日

今日は元旦である。蒲州で昭和十六年の正月を迎えようとは夢にも思わなかったことである。

午後は萬固寺へ行った。城外に出ると、東南の山の中腹に塔の見える寺がある。乗馬で昨日来た道をまず駅まで行き、鉄道を渡って東南に進む。駅から約三キロの道のりである。西南を望むと遙か山の上にも大きな甎塔が見える。これが六官山で、中條山脈の一番端に当たるといふ。中條山腹の麓に近付くと河があった。河床は一面の砂で、流れは少ないが、雨期には増水するとみえて、兩岸に氾濫したあとがあった。山にかかるると忽ち深い谷川となって、美しい水が音を立てて流れてくる。谷間には岩が多く、馬が蹄を滑らせたりした。附近には竹藪もあった。谷は東南に向かって切れこんでおり、寺は左手の斜面にあって西面している。

寺は大雄宝殿、水陸殿、如来殿の三層からなり、山の斜面に段を作って建てられてあった。遠くから見えていた甎塔は八角十三層で、水

陸殿と如来殿との間にあった。建物はみな軋築であるが、実に徹底した破壊を被っている。大雄宝殿のごときは全く屋根がなく、大きな塑像の本尊も雨に解けて泥の固まりとなっていた。碑記は多数あったが、大部分明代のもので、ただ後唐の天成元年（九二六）と北宋のものが二、三注意されただけであった。

しかし、ここから西北、蒲州城を隔てて黄河を望んだ景色はまたとなく雄大であった。帰りに中條山脈がきれた後方の空に、峨々として聳える華山の峯が見えた。夕焼けの空を背景に黒く浮び出た、あの特徴的な山の姿は画のようであった。やがて黄河に夕日が沈む。城内に帰りついたときはすでに七時二十分、日はとつぷりと暮れていた。

風陵渡を臨む

一月二日

今日はトラックで風陵渡行きだ。午前九時に出発する。やはり東門を出てから道を南にとる。左には中條山脈が間近に迫り、右には広い黄河の水面が連なっている。かつてはこの道路に沿って風陵渡口まで鉄道がつけられていたのである。今はことごとく破壊されて、一片のレールも枕木も残っていない。やがて段丘地帯に入り、そこに開かれた切通しをしばらく走る。もともとこれは鉄道を通すために開かれたものなのである。その断面にはところどころ、古い土器の破片が含まれているのが見られた。恐らく漢式に属するものであろう。

あとで思い出すと、太原の博物館に永濟縣で同蒲線敷設工事の際に出土したという珍しい土器が陳列されていたが、それには上元頭村、東王村、西王村などの地名が見られた。今通ったところが即ち上元頭村であり、東王村や西王村はもつとさきの風陵渡に近いところなのである。

やがて長旺村につく。県城から二十余キロ。時計を見ると十時十五分であった。二、三の民家で最近二賢祠から持ってきたという石碑を見せてもらった。

二賢祠とはいっても有名なく伯夷叔齊の祠廟で、この村からつい半キロほどさきの路傍にある。行ってみると、実に惨憺たる廢墟と

なっている。祠は街道の左側、台地の端に立っている。トラックが止ったのは、丁度表門と二門との中間であつた。不思議に思ったが、このトラック道路はもとの鉄道のあとであつて、それはこの境内を南北に貫いているのである。伯夷叔齊の塚だという二つの土饅頭のほかは、あらゆるものが壊れていた。石碑までがぶちこわされている。もとこの一廓は松柏の茂った森であつたが、最近になって刈り取られてしまつたそうである。

この辺の山が首陽山なのであろうか。伯夷叔齊が実在の人であるかどうかは別としても、この墓の由緒は古い。すでに『水經注』にもこの位置が明記されているのである。長い歴史の間には幾度も現在ののような破壊を受けたこともあろう。土饅頭の附近には繩蓆文を押した古い甎や瓦なども散らばっていた。

次いで、かの楊貴妃の故郷だという伝説のある獨頭村を過ぎ、東行して東章村に入った。ここは街道からも、もとの鉄道からも大分隔つていて、黄河を遙かに望む台地の上にあつた。それから趙村まで行く。わりあい大きい部落だつた。ここから風陵渡までは僅かに一キロしかない。その間は波のように起伏のある丘陵で、一面に雑草と灌木の茂った荒地である。ところどころ民家らしいものがあつたが、近づくると全く壊れて人も住んでいなかった。この丘陵の最突角に立つと、風陵渡口をま下に望む。黄河の岸に沿うこの部落は全くの廢墟となり人影も見えない。ただ焼けただれた貨車の残骸がごろごろと横たわっているのみである。もとはこの丘陵を東へ迂回して、そこまで鉄道がつけられていたのであるが、今はレールのあともない。ここから対岸まで約一キロ。しかし、今日はあいにく霧が多いので眺望がきかない。右手に潼関の西門がぼんやりと聳え、城壁が丘陵の斜面をうねっている。その中には人家は割合に残っており、煙があちらこちらに立ち上がるのが見える。上の中腹には壊れた鉄道の上に壊れた貨車が転がっている。これが龍海線なのである。この頃は午後になるときまつて霧が出るそう。そのために華山も見えない。ただ西の方、渭水が複雑な屈曲をなしつつ黄河に流れこむところがぼんやりと見えた。風陵渡という地名のそもその起りである風后女媧の墓は、趙村の附近にあるとのことだつたが、ついに見る機会を失した。一路蒲州へと戻る。帰ってからまだ時間があつたので、城壁に駆け上る。西壁に上ると驚いたことには、すぐ足もとが黄河だつた。つまり城壁の外がすぐ黄河なのである。西門は閉されている。河とはいっても広い一面の泥水で、ところどころに州が浮かんでいる。水の流れはなかなか速い。これを越えて遙か対岸に陝西を望む。ただ地平線が見えるだけで、山も部落も樹林も見えない。黄河と城壁とはもともとこんなに接近してい

たのではない。本流がしだいに東の方へ移動して岸を削っていくのである。以前西門の外には禹王廟と、開元（七一三―七四一）の鉄牛といわれるものがあつたはずだ。この鉄牛は楊貴妃が長安から故郷へ帰るとき、黄河に舟橋をかけるのに利用されたのだという。どこを見ても、それらしいものはない。みな泥の底に埋まってしまったのであろう。ただ一つの石碑が蘆の間に頭をもたげているのみであつた。

西北角に至ると、水がものすごい勢で城壁の裾を洗っている。町の人はいつているそうだが、こうして浸蝕されてしだいに蒲州は黄河の中に没して行くのだらう、いったん城壁が壊れたあかつき、この町はいかにみじめな目にあうだろうと。そうしたわけで、人々は居を東へ東へと移し、城内は寂びれ、東関のみが辛うじて町らしい形態を保っているのである。やがては、さらに東の丘陵に町を移さねばならぬときが来るかも知れぬ。北の城壁の中央には玄武廟のあとがある。もちろん建築は一つもない。金の正大六年（一二二九）の重修碑が二つに破れて転がっているのみであつた。

舜帝の故郷

一月三日

午後から北方の舜帝村へ行く。二時出発。馬で行く。東門を出て、やがて黄河に沿って北に向かう。今日は陝西の山々がぼんやりと低く見える。河岸の土地は白いソーダの吹き出した荒地であつた。耕作物は殆んどなく、草さえも僅かしか生えていない。あちらにもこちらにも、その白い土を掻き集めて小山が作つてある。これを焚いてソーダを作るのである。道路に沿って七里渡、城莊、方池村などという部落があつた。右手には一キロほどの距離をおいて丘陵が連なっている。六時前に舜帝村に着いた。蒲州から凡そ二十キロの道のりである。夕方のか寂しい陰気な部落であつた。

早速に舜帝廟を見に行った。村の辻に「大孝有虞舜帝故里」という大きな碑が立っていた。舜帝廟は東の村はずれの丘の麓にある。小さな門と小さな堂があるだけで、堂の中に舜帝の像がまつてある。門の外に舜が子供のとき生き埋めにされたという井戸があつた。村の中の東大廟には、舜が作つたという大きな壺が置いてあつたが、それははるかに時代の新しいものだった。

あるお百姓の家に宿をとった。この辺の農家に普通な、正堂は天井が高くからりとして、正面に祖先の位牌などをまつっている。遅い食事をすましてから、その家の主人もやってきてみんなで十一時頃まで話していた。

一月四日

朝早く食事もせずに乗馬で南陶城村へ行く。ここは漢代の陶城縣のあとだといひ、光緒『永濟縣志』には古城が残っているとあったが、どこをみても全くそれらしいものは見当らなかった。北を望むと立派な廟の屋根が見える。それは北陶城村の府君廟なのである。府君廟は即ち崔府君廟である。崔府君とは唐代の人で蒲州の刺史となって善政を施したといわれ、北宋以後とくに民間に信仰が広まった。遠くから見えていた大きな屋根は戲台である。なかなか広い境内で、元の泰定四年（一三二七）の碑が注意をひいた。

帰って飯を食い、十二時少し前に出発。東の丘陵を越え台地の上に出て、東南に向かい韓村へ、栲栳鎮をめざす。栲栳鎮はさらに東南のなかなか大きい部落で、この地方の一中心をなしているらしい。新教の教会があり中国人の牧師がいる。これからの予定は古城村の土城を調査することであった。古城村というのは、ここから東へ二キロ、黄河の岸から三キロ離れており、臨晉縣に属している。東へ一路坦々たる麦畑の間に開かれた自動車路を進むと、いつとは知らぬ間に県境を越えて臨晉縣内に入っている。行く手には三三五五大きな古墳が群をなし、その向こうに断続する土城が望まれるのである。土城は非常によく残っていた。高さは六、七メートル、一辺凡そ一キロはあろう。

城門のあとなどもほぼ指摘することができる。しかし、形は不規則で、東壁のごときは著しいジグザグ形を示している。古城村の部落はその西南隅にあった。至るところに古い土器片が散乱していた。蔵手紋の瓦当もあったし、なかには戦国時代にも溯るかと思われるようなものもあった。南壁は殆んど頽圯してあともなく、すぐ足下から五姓湖の水面が広がっている。それを越して彼方には、中條山の険しい断層崖が望まれるのである。果してこれが何という城の遺址であるか、蒲坂縣か解縣か、俄かには解決できないと思う。

一路蒲州へ戻る。途中、花園村の普救寺に立ち寄った。あの最初来たときから美しい塔の见えていた、東の丘陵の上にある寺である。これが有名な『西廂記』の舞台となった寺だという。かの鶯々が張生を見初めたのは、普救寺の西廂だったのである。やさしくも懐かしい旧蹟ではある。塔は方形十三層、明代の重修のあとが多いが、原形は五代宋初になったものであろう。石で塔の表面の甃を叩くと金属性の音を発するなど人がいつている。調べてみると、古い言い伝えがあるとみえて、『縣志』にまでそんなことが書いてあった。塔の東斜面には

本殿や金剛殿が南面して立っているが、いずれも甚だしく荒廃して見るかげもない。ただ北宋の宣和六年（一一二四）の鉄鐘が立派だった。

解縣と安邑

一月五日

今日はいよいよ出発であるが、汽車が出るまでまだ暫らく間があるので、また善救寺へ行った。昨日気が付かなかった碑もあった。

そのままずっと駅まで行く。午後二時発車。四時半、解縣に着く。城内は道路は埃っぽいが、町中はわりあいによく整っており、太い槐樹の並樹なども植わっていて、どことなく落付きがあるのが嬉しかった。夕方までまだ少し時間があるので城内を歩いてみた。ここでもやはり家のあるのは、中央の四街を中心としたところだけで、四周は荒れているが、蒲州ほどのことはない。関帝廟は西門を出たところにあつて、その間はあたかも門前市をなしている。両側には丁度浅草の仲見世を思わせるような商店が並んでおり、もう夕方だのに人通りも少なくなかった。

一月六日

午前に県公署へ行き、東南にある霍光の墓を見に行つた。小さな土饅頭で、前に「漢大司馬大將軍博陵侯霍光之墓」という立派な碑が立っているが、この墓の由来は大分あやしいようである。その東に孔廟がある。それから東関をぬけ、半キロほど離れた風后廟へ行つた。境内はがらんと広く、ただ戯樓と本殿とがあるだけで、それも余り古いものではない。東隣りには薬王廟があつて、角の生えた神農像がまつてあつた。そのさきに霍光の祠廟があるというので行つてみた。二、三百メートル行くと北側の民家に博陵侯という提灯が懸っており、なかの一室にはやはり霍光夫妻だという神像をまつている。しかしこれはどう見ても霍氏の個人的な家廟にすぎず、霍光の關係に至つては城内の墓と同様あやしいものである。もっともこの附近には霍姓が三戸あるということだから、なお調べる余地はあろう。

城内に戻つて関帝廟へ行く。外観にたがわず美しい立派な建築だった。本殿の崇聖殿は高い壇の上に立ち攀龍の石柱を廻らした七間の堂々たるもの、その後方には夫人をまつた聖宮を隔てて春秋樓があり、樓上には関羽が燈下に春秋をひもといている像が安置してあつた。境

内は広く、すべてが整然としているが、何もかも新しく、咸豊以前に（元年は一八五一）に溯るような建築は一つもなかった。碑記のごときも、萬歴よりも古いものがないのは寂しかった。

しかし、中国全体に何千何万とある関帝廟の総本山である。建築が少しでも古くなると、すぐに新築が行われたからかも知れぬ。一昨年の秋、復興された大祭には実に百万の信者が参集したといわれるから、信仰の盛んなことを推して知るべきである。縣城の東北常平村は関帝の故里といわれ、そこには墓もあれば、子孫も連綿として続いているという。現に運城の警察署長関鐵忱氏は関帝五十九代の後裔だそうである。

昨日乗ってきたと同じ列車で運城に向かう。僅か二時間の行程だ。いよいよ明日は、十日余りの間、根拠地となったこの運城を去るのだ。夕食をすますと、拓本屋がやって来た。頼んでおいた塩地廟の拓本五十余枚は見事完成していた。明日は安邑へ行くから房公祠の造像の拓本をとりこないかという、早速承知してくれた。明朝駅で会う約束をする。

一月七日

時間はそう早くもないのに、何となく薄暗い。自動車で駅に行く。駅に着いて初めて事故のために列車が不通になったことを知った。昨夜約束しておいた拓本屋はどうしたのか来てない。仕方がないので一旦城内に戻り、そこから自動車で安邑まで行くこととなった。

城外に出ると、すぐ行く手に安邑の城壁が見えている。鉄道に平行した平坦な道路をまっすぐに走る。安邑近くになってから、右手に一辺二、三百メートルの小ぢんまりとした土城が見えた。形がよく整っている、容易に注意をひくが、あとで聞くとこれが魏豹城だというのであった。

城内に入り、早速県公署に行く。この町は解州に比べると荒廃の度は大分ひどいらしい。もとの県公署は全く倒壊して、現在は城隍廟が県公署になっている。目的の造像は、その東廂に保存されているが、その中に綿花の袋が一杯積み込んであって、それを外に出してもらうのに一苦労だった。この造像は旧県公署内の房公祠―明末の縣知事房之屏をまつる―にあったが、建物が倒壊してからここへ移したものである。その数は全て十六であった。もともとみなこの近郷にあったもので、民国十二年（一九二三）のころ、ときの縣長鄭裕孚が蒐集して房公祠においたのであるが、最近ここへ移す際にもかなりなくなったのであろう。いずれも六朝のもので、特に珍しいというものはない。

造象をくわしく見るのはあとにして、さきに文廟へ行つた。大成殿は明の正徳の建築で比較的よく残っており、中庭の宋の「大観制作之碑」が立派だった。東北隅にある太平興國寺の塔に行く。汽車からも第一に目につく八角十三層の輦塔である。中央に縦に入つた亀裂が、いかにも危つかしい。しかし、形は美しい北宋塔の特徴を備えている。塔のほかには寺らしい建物は殆んどない一帯の荒地だ。そこに半ば土に埋もれた造像の破片があつた。丁度来合わせた車に積んで縣公署に運び込んだ。

午後はまだ県公署へ行つて、写真を撮つたり、少し拓本を作つたり殆ど半日を費したため、魏豹城へ行く機会も失つてしまった。夏縣へ行く連結もあるとのことであつたが、これも諦めることにした。夏縣には司馬光の廟があるし、城外にはその墓もあるのである。

帰途につく

一月八日

朝食の用意が大分遅れ、やつとのことで駅にたどりつくと、丁度定刻だった。九時三五分発。空は雨模様で暖かつた。臨晉へ着いたのが四時半。洋車の上にいると肌が少し汗ばんでくる。町に随分埃が多いこと、東関が大きくて発達していることなどを初めて知つた。

一月九日

七時に起きる。まだ真つ暗だ。列車は定刻八時に五分遅れて出発する。もうこの旅もいよいよ終りだと思つと、やたらに体がだるくなつた。わりあいこんで窮屈な座席のなかで横になつたり、起きて本を読んだりしていた。

昨日に引き替えて晴天だ。くっきりとした青色の空、黄色い家、その影までがあざやかに見える。義棠鎮を出ると広々とした平地だ。介休、平遥と往きには村の墻壁の立派なのが目についたが、帰りは墓ばかり目につく。その間を牧人が羊の群を追っている。麦の芽が大分伸びた。太谷の塔を右手に見る。冬枯れした樹木の彼方に夕日が沈み、あたりは灰色の闇が近寄ってくる。八時太原着。久しぶりで明るい電燈を見てほつとしたような氣になった。

一月十日

何となく薄暗い。九時に発車。猛烈な風が吹き始める。駅を出ると、すぐに外は埃と水蒸気とに閉ざれて、眺望は全くきかなくなる。太陽もぼんやりとしか見えない。それでも丘陵の間に入ると埃は幾分か鎮まって、氷の張った谷や急な階段畑などが目についた。

娘子関あたりから夕暮れになる。石門に着いたのは九時だった。ここから寝台車が付けられたので、それに移った。

一月十一日

朝方になると大分寒くなった。眼が覚めたきは既に蘆溝橋に近かった。デッキに出ると、河風が驚くほど冷たい。どうしたわけか列車の速力は急に鈍くなる。七時着というのが一時間半も遅れて正陽門站に入った。

暫らく離れていた北京が故郷のように懐かしまれた。それとともに一カ月の旅行がまるで夢のように遠い彼方に消え去って行くような気がした。今はただ一刻も早くゆっくりと自分の蒲団の上に寝転びたいと思うばかりであった。さすがに北京では洋車の上は寒く、足の先がしびれるようだった。